ラフカディオ・ハーン著作集第５巻
神戸クロニクル論説集

（恒文社発行・佐藤和夫 訳・西脇順三郎、森亮 監修）より

これらの論説の中に、今日からみると差別的表現ととられかねない箇所がありますが、作品の時代的背景と作品価値に鑑み、修正・削除は行わず、原文のままの表記といたしました。

日清戦争の予想される結果

1894年10月15日　月曜日

現段階において、今度の戦争の結果について予言を下すことは誰にもできないが、注目せざるを得ない、考慮に値するいくつかの可能性はある。その一つは日本の勝利が、清国の社会的発展に及ぼす最終的な結果である。

清国の威信はすでにいちじるしく損なわれた。戦前、清国は軍事力において非常な進歩をなしとげたと一般に信じられていた。清国のライフル銃と大砲の優秀性、外国で教育された陸海軍の将校の熟練度、最良の近代兵器生産のための精密機械の輸入、有事の際に召集される120万の兵力、10年前のトンキン国境における清国軍によるフランス軍撃退の恐るべき意義などについて、われわれは聞かされてきた。清国がインド北部の権益保護のためロシアに備えて協力する、とイギリスは信じていたと言われており、ひそかに軍事同盟が結ばれたともささやかれていた。

しかし、こうした威信はすべて完全に消え去ってしまった。日本の陸軍と海兵隊は清国の精鋭軍をいとも容易に打ち破り、結局、清国は科学戦において何らの進歩もなしとげていなかったことを、世界の国々に確信させるに至った。最近の海戦において清国の戦艦がよく戦ったことを認めるにしても、操艦が外国人の手によってなされたことを思い出さざるを得ない。そのほか、今度の戦争で、清国は何らの戦闘能力も示さなかった。伝説的な大軍隊はついに姿を見せなかった。偉大な将軍たちは、

主として紙上においてのみ存在していたようである。戦争が日本の予期せぬ能力を示しつつある一方、清国はそのまったくの弱さをより明白に見せている。巨大な国土、資源、堂々たる忍耐力は、当面の敵国に対して、何らの脅威も与えなくなってしまった。ロシアの新聞は、冷然と、この王国を西欧の列強の間で分割すべしと提案している。

しかしながら、清国が日本によって十分にはずかしめられた後も、西欧の列強がこの大帝国の分割にけっして手を貸さず、解体を許さないと決めると仮定してみても、清国は自己の立場がいかに危険であるかにまだ目覚めようとしないのだろうか。清国は一大改革を計画し、実行するのであろうか。あるいは、その政治制度がどうしようもないほど腐敗してしまい、改革は不可能で、結局、外国の保護が必要であることが明らかになるのだろうか。

これらの質問には容易に答えられるものではない。しかし、清国のような極端に保守的な国は、すべての保守的な民族が持つ特質——自己保存の強力な国民的本能を大いに持っていると言っても、間違いではないだろう。

平壌の兵站司令部　食糧や馬糧はむしろ製の袋に入れて戦地まで運んだ（ビジュアル・ワイド　明治時代館　小学館より）

もし清国にそれがあるとして、またその本能が完全に目覚めたとしたら、いかなる国内的な腐敗もその前進の行手をさえぎることができないだろう。もし清国の歴史が信頼できるものであれば、この帝国の過去には多くの腐敗の時代があり、それが改革の時代と交互に繰り返されたのである。改革しようとする清国の現在の能力は、この国民的感情の復活いかんにかかっているだろう。もし何らかの光景が清国にそうした感情を復活させるとしたら、それは日本軍によって占領された北京の光景であり、また日本の一大臣が清国の皇帝に諸条件を押しつけているという光景だろう。

西欧が長期にわたり、しかも無駄に与えつづけてきた戦争の科学的技術に対して、清国がいかに頑迷かつ迷信的な嫌悪感を持っていたとしても、また今もなお持っているとしても、日本がそれを用いて清国の誇りを打ち砕いたからには、清国がその最高の重要性を疑いつづけることはもはやほとんどできないだろう。このような屈辱を受けた後、清国が今では役に立たなくなったすべての潜在能力を開発し、発展させる仕事にただちに取りかかれないとは言えまい。鉄道の建設、真に有能な軍隊を持つ陸軍の形成、官庁の浄化、よい給料によって最良の外国人の教師を雇い、権限を与えることなどがそれである。なぜなら、清国がそうした力と意気込みを示さない限り、ついには分割されることになるのは、ほとんど確実だからだ。

そして清国が目覚めたとき、ほかの国々にとって、新しい一大軍事強国として深刻な脅威となるだろう。そうした場合、ピ

アスン博士の予言は実現されそうだし、西欧は清国の鼻息をうかがわねばならない羽目に陥るだろう。

他方、仮に清国が分割されたとしても、その民族の本来の姿である考え方や傾向を喪失してしまうことはまずあり得ない。みずからの主要な力によって多かれ少なかれ文明化し、外国の支配によって外国の芸術と科学を大幅に取り入れることを余儀なくされたとしても、この強制された民族の文明は、足枷を取り去られたときにいっそう恐るべきものになるべく、準備を進めていたことになる。ヨーロッパの支配下で、東洋人が科学的な文明を実際に取り入れられないこと、あるいは外国の支配に対して力を合わせられないことは、インドが実証していると言った人がいる。しかしインドは100以上の言語が話されている国である。そこでは民族、言語、宗教が入り混じっている。それと比べると、清国は均一である。清国は一つである。清国の未来を推測する大きな困難はここにある。

地震と国民性

1894年10月27日　土曜日

近年起こった大災害――明日が3周年に当たる岐阜の地震、比較的最近の鳥取と岡山の洪水、つい最近の山形の災難――は、実に国家的な不幸とも言うべき性質のものであった。限られた地域だけを直接襲うにせよ、そうした天災の間接的な結果は日本全土で感じられ、国庫からの援助によってのみ救済され得る

のである。しかし、定期的に起こるそれぞれの災害の後に見られる日本人の素晴らしい回復力、あるいは苦難に際しての見事な忍耐力を、むしろ称賛すべきなのかもしれない。実際、回復力も忍耐力も独特なものである。そして、何千年にもわたって日本がまったく同じように苦しんできたことを考えると、そうした異常な条件が国民性に何らの影響も及ぼさなかったと信じることは難しい。

日本の物質的な存在のいくつかの特殊性は、おそらく部分的にこの災難の条件――日本の大いに手の込んだ文明はこの条件のもとで発展したのだが――に起因しているのだろうが、それをあえて述べることができるとすれば、「不安定（インスタビリティ）」と言うべきだろう。（この言葉を使って筆者は物質的な生活のことを述べているのであり、精神的な生活のことではない。そうした条件の心理的な影響については別の考察が必要である）。日本が有史以来の比較的短い期間だけでも、60以上の首都を持ったという注目すべき事実をくわしく論じるまでもなく、不安定というこの特徴は、ほとんどすべての日本の建造物のかりそめの性質に十分に実証されている。

日本の都会はいずれも、一世代の間に完全に再建されると大ざっぱに言えるかもしれない――ただし、少数の巨大な要塞と有名な寺院は除く。鎌倉にある古い建築物のようないくつかの寺院は、中国人の手になるものである。戦争、火災、洪水、地震だけが、この絶え間ない再建の原因ではなかった。最も単純な原因は、長持ちするよう建てられた家がほとんどないことで

ある。日本の都市の大半は数日で完全に建てられる家々からなっている。日本人には、筆者が使う言葉の意味での先祖伝来の家がかつてなかった。極東の魂にとって、最も貴重な場所は生誕の地ではなく、埋葬の地、すなわち家族の墓場、祖先の墓地である。そして実際、死者が安らう場所を除くと、この国にはほかに永遠のものがほとんどない。最も神聖な神社――伊勢神宮でさえ、伝統の習慣によって二十年ごとに取り壊され、再建されねばならない。

要するに、自然の不安定に人工的な不安定を対置させることにより、日本人は環境の厳しく荒々しい条件に対処してきたようである。山が形を変え、海岸線も河川の流れも変わるような国土においては、大理石の寺院や花崗岩の記念碑を建てるのは無駄だったのだろう。こうした環境の下で発達した最も注目すべき建造物――古城の巨大な石垣――は環境への順応性の見事な例を示している。ほかのいかなる石造建築も、大きな城の多くが遭遇してきた衝撃に耐えることはできなかった。ところが、セメントを使っていない巨大な石垣の石は、地震の振動のたびにますます密になるだけで、さらに頑丈な正面を形作る。

しかしながら、日本の自然条件が前述したような形態の非永続性、場所の非恒常性を十分に説明するとは確信できない。経済的理由があったかもしれない。民族の性向――日本人が移住を好む祖先を持っていたと仮定すれば――は建築の様式と物質の選択に影響を与えたかもしれない。その原因はおそらく複雑であったろうし、結果は独特だった。

そのような不安定のもう一つの結果として、根気、忍耐力、環境への自己順応性といった類まれな国民の能力の形成を予想できるかもしれない。そして、これらの能力こそ、まさしく日本人の中に見出す資質である。そして、自然の影響に永遠(エタナール・ヴァ)なる消滅(ニッシング)の教義を持つ深遠な仏教の影響を加えるとき、この民族の物質的、道徳的生活における最もいちじるしい特徴の大半は、日本の国土の中で発展してきたのであり、アジアの大草原(ステップ)で発展してきたのではないと信じられよう。日本の社会が多少なりとも変わりやすく、いまだに外部の影響を拒否している清国のような頑固な保守主義に、けっして凝り固まることがなかったのは、おそらくとくに場所的な影響があったからであろう。二つの複雑な文明を吸収することを可能にした日本人の素晴らしい同化能力は、少なくとも部分的には、岐阜や山形の災害と同じような驚くべき性質の災害を数えきれないほど経験することにより、発展してきたのかもしれない。

西洋文明の採用は、よりおおきな安定状態への傾向を作り出すことが期待され、その傾向はすでに存在している。しかし、そうした安定は相対的なものであり、それ以上になるかどうかは、はなはだ疑わしい。「イギリスの恐ろしいまでの秩序正しさ」、あるいは西洋の偉大な共同体に見られる、ゆっくり時間をかけてでき上がった力と統制された堅牢さに比肩するものが、将来の日本で生まれる可能性はまずない。といっても、その逆をあまり強く予測すべきでもない。日本が信じられないほどの短期間に、西洋が提供できたすべてのものを受け入れ、消化し、

利用できたのは、その社会の非常に変わりやすい性質によってである。そして、それを利用することによって日本は、定期的に国土を荒廃させる恐ろしい突然の災害から、より効果的に自己を守る手段をやがて見出すだろう。

ヨーロッパの将来

1894年11月6日　火曜日

世界で最も強力な君主（訳注＝ロシアのアレクサンドル三世を指す）が死んだので、ヨーロッパで戦争が起きはしないかという大問題が、一般の人々の間で、当然のことながら考えられている。というのは、政府のほんのわずかな変動も、今や、ヨーロッパがそのおかげで長いこと平和を保ってこられた微妙な力の均衡に、影響を及ぼしかねないからである。ともかく平和な12カ月が過ぎるたびに、これで戦争の可能性が薄らいだと思ってほっとする。年々、軍備はますます恐るべきものになっているが、その巨大さ自体が攻撃的な衝動の抑制になっている。しかし、1300万人の軍人によって進められようとしている衝突の恐ろしい可能性は、ますます国際的な悪夢になりつつある。

その上、毎月、毎週、24時間ごとでさえ、西洋列強の商業上の利害関係は、ますます密接に相互に依存するようになり、各国の産業はほかのすべての国の産業との結びつきを強め、ヨーロッパ貿易のすべての縦糸と横糸はますます密に織り合わされている。社会の複雑さは驚くべき速さで増大し、その動きのた

びに戦争の可能性は必然的に減少していく。なぜなら、一国民の産業生活にいかに微細な損害が加えられても、すべての人がそれを感じ、苦しむ時代は遠からずやってくると思われるからである。おそらく、さらに25年間この武装した平和がつづけば、少なくともヨーロッパにおける戦争は不可能になり、国際的な自殺行為と同等のものになると考えてよいだろう。現在のところ、ヨーロッパは一つの巨大な産業連合体――各国が各州として連合する巨大な商業共和国の方向に着実に進んでいる。

時代のもう一つの徴候は、戦争に対する率直な恐怖感である。フランスはもはや「復讐（ルヴァンシュ）」を口にしない――実にジュール・シモン氏の雄弁は、この点についてけっして忘れることのできない教訓をフランス国民に与えた。たった3日間の戦争が今や現代ヨーロッパにおいて何を意味するかを、真実をもって明白に、容赦なく正確に、すべての大衆の眼前に示してみたまえ。そうすれば、軍事的な栄光への最も熱烈な切望もたちまち冷えてしまうだろう。シモン氏はあえてこの事情を示したのである。彼は行軍の費用、戦闘の恐怖、病院の戦慄、財政への衝撃、生まれていない世代への影響を述べたので、「復讐」を叫ぶ声はすっかりやんでしまった。フランスは、アルザス・ロレーヌ問題に長いこと沈黙を守っている。

ドイツにおいては若い皇帝の治世の初期に、彼のほんの気まぐれによってヨーロッパはいつ致命的な衝突に突入するかもしれないという恐怖が、常に述べられたにもかかわらず、彼がその気まぐれを平和のために利用していることは、今やまったく

明らかである。イギリスにおいては、戦争に対する一般大衆の恐怖が発生した。国家存亡という事態にでもならない限り、おそらくイギリス人は、いかなる文明列強との衝突にも同意せず、むしろ社会改革に専心するだろう。言うまでもなく、事実上イタリアは陸海軍の費用で破産しており、戦える状態ではけっしてない。

列強の中で、戦争によって失うものが少ないのは、ロシアだけである。この大国の成長の歴史において、戦争は正常な状態だった。全ヨーロッパはロシアに対して用心している。ロシアのいちじるしい貧困が力なのであり、その力は永遠の脅威である。それは年々大きくなっていく脅威でもある。ドイツの4倍の速さで、人口が増え、領土が地球上の6分の1を占め、純粋な侵略活動のための無尽蔵な資源があり、将来は総計6百万の騎兵隊に拡大する軍事組織を持ち、過去の歴史において世界を三たび席巻したアジアの草原の遊牧民を、すべて兵役につかせることができる。ロシアのとどまることを知らない増強は、ヨーロッパが共和国になるか、コサックの支配下になるに違いないというナポレオンの予言（彼はおそらく時間的予測に関してのみ誤った）を正当化するようである。

コサックの支配下になることを避けるために、ヨーロッパは共和国になることを急いでいるようである。ヨーロッパは、産業活動においてすでに共和国である。軍国的なドイツ帝国に至るまで、思想と感情は共和国的な傾向にそって進んでいる。共通の危機意識が偉大なヨーロッパ列強をいっそう緊密に結びつ

け、一方、産業上の利害関係と科学の進歩が、絶えず思想と感情の一致への傾向を押し進めている。この一致は、ますますアジアの強国になりつつあり、成長の可能性がほとんど計り知れないロシアに対する防壁になっている。人口が自国の領土内でこれ以上増加できないという明らかな理由により、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリアといった国々が、やがて軍事的な拡大の極限に達するに違いないのに、ロシアは今後の5世紀にわたって、なおも国力を伸ばしつづけるかもしれない。しかし、ここしばらくの間は、ほかのヨーロッパ諸国がこのように一致しているので、西方に向かって攻撃をしかけることはあるまい。しかしながら、ロシアがそうなるかもしれない2つの条件の危険性はある。

これらの危険性の最大のものは、無政府主義、社会主義、共産主義、およびそうした大衆運動のようなヨーロッパ内部の混乱により、国家組織が崩壊あるいは弱体化することである。これらの大衆運動が絶えず力を増しているのは、現状に対する不満の証拠である。ロシアがニヒリズムに悩まされているのは事実である。しかし、ロシアのニヒリズムは表面的な動揺にすぎない。国民生活の致命的な部分に達しているわけではない。来たるべき世代の人々の心にまでは浸透し得ない。反対にヨーロッパの国々においては、表面的な生活ばかりでなく、社会生活の最深部にまで崩壊のさまざまな要素が浸透しているのである。

もう一つの小さな危険性は、ヨーロッパの特定の列強とロシアとの結合である。これは最近のロシアとフランスとの見せか

けの友情にも示されている。われわれは見せかけと言う。なぜなら、フランスがロシアと同盟することにより、当面の敵を脅迫することに一時的な喜びをいかに感じたとしても、ロシアの友情はドイツの敵意よりはるかに恐ろしいものであることを知らなければならないからである。言語を絶する流血と歴史上で最も恐ろしい戦争の後、ロシアの援助を受けたフランスが、ドイツ、イタリア、オーストリアの連合軍を撃破できたと想像してみよう。その結果はどのようなものになるだろう。

文明を守るためにドイツの築いた防壁がなくなったら、フランスはみずからの地位を守ることを期待できるだろうか。ヨーロッパがコサックの支配下になることは避けられないのか。フランス自身は、最終的に、単なるロシアの属国になってしまうのか。そのとき、すべての自由主義機関は、たしかにアジアの専制君主制によって粉砕されてしまうだろう。個人生活の自由とともに、宗教の自由は過去のものになるだろう。ロシアの法王がノートルダム寺院でミサを行なうことになるだろう。西方教会と東方教会の古代の分裂も、大西洋から中国海に広がる一大帝国による、最高の仮借なき東方的教権支配によって、永遠に安定してしまうだろう。

アメリカにおける人口増加

1894年11月７日　水曜日

合衆国の歴史においてきわめて重要な事実は、人口の増加が予想に反して止まったという昨年の発表である。人口増加の停止は、何よりもまず生活の困難がいちじるしく増したことを意味している。この15年間に、アメリカにおける生活の困難が急速に増大したことは否定できない。25年前のアメリカでは、貧しくとも勤勉な者には、ほかの国でかつて示されたことがなかったようなチャンスがあった。おそらくそういうチャンスは、オーストラリアにほんの短期間あっただけだろう。真に手職を習得した着実で精力的な機械工なら誰でも、何年間かうまく節約して生活すれば、独立して開業するのに十分な賃金を手に入れることができた。そして、何千人という人々が独立以上の何かを手に入れたのである。

農業移民にとっては、西部で豊かな土地を買い、ついには金持ちになるという素晴らしいチャンスがあった。際限のない西部の平原は、いまださえぎるものの何ひとつない、円形の澄んだ青空につながる緑の海だった。現在の桁はずれの鉄道網はいまだ敷かれておらず、今や路面電車が走っているところでは野牛の群れが草を食んでいた。開拓線が広がりはじめたとき、抜け目のない開拓者が土地を買い、家を建てる素晴らしい機会が新たに生じた。そのとき、名目だけの価格で買った何エーカーかの土地は、今では10ドル金貨を敷きつめてもほとんど買えないほどになっている。当時ほど職人や農民が尊敬された時と場

所はない。鍛冶屋は最上の仕立ての夜会服を着て舞踏会に出かけることができ、印刷工はワイシャツの胸当てにダイヤのピンをつけて闊歩した。当時の農夫は、ヨーロッパの貴族が自慢できたより広大な土地の領主に、数年のうちになれる期待を持って、労働を苦しいとは思わなかった。

増大する西部の町の警官はそのころ、高給を取り、夏はしゃれた制服を着て巡回したものである。それは奇妙な時代――長くつづくにはあまりにも奇妙な時代だった。そして、不思議な光景がいくつも見られた。今では十分に禁止措置が講ぜられている賭博が、当時はブレット・ハートの小説に描かれているように流行していた。今日では堂々たる都会であるカンザスシティが、まだできたばかりの町で、朝になるとその通りは、前の晩に戸口から投げ捨てられたトランプで、しばしば真っ白になったと言われた。なぜなら、賭博をする人間は、同じトランプで二度勝負する危険を冒さなかったからである。

４分の１世紀の間に、アメリカはすっかり変わってしまった。平原、ロマンスを秘めた大平原は、もはや存在するとは言えない。そこは、畑、村、町、都会で覆われている。鉄道は西部を「作り上げた」だけではない。産業主義（インダストリアリズム）を極限にまで拡大させてしまった。どこへ行っても昔の急成長した木造の町の代わりに、石と鉄、レンガとセメントの建築物が増えている。炭坑の集落があったところには、何世紀も十分に耐えるがっちりした街が建っている。いたるところで最新の発明が最大限に利用され、蒸気で動くエレベーター、電灯、電話、電信の設備もある。

しかしまた、どこへ行っても社会状態は硬化し、階層化してしまった。１日で財産を築くチャンスはもはやなくなった。ますます序列化され、西部もすべての点で、ますます「ヨーロッパの無力な君主国」のようになってしまった。この広大な共和国のすべての富は、着実にごく少数の者の手に渡りつつある。そして資本家たちは、天才でなければ食い込めないように、自分たちの地位を固めてしまった。二束三文で買えるよい土地はもはやない。高い賃金も望めない。労働賃金は着実に切りつめられている。投下資本の巨大な結合や蓄積が競争を押しつぶし、並の勤勉さだけではどんなに必死に努力しても、一本立ちするのを絶望的にしている。概してアメリカの労働者階級の生活条件は、ヨーロッパ各地とほとんど同じように困難になり、やがてはより困難になる可能性が十分にある。少数の者に集中した無限の資本とそれを使う無限の権力は、イギリスやドイツでは考えられないような状態を必ず作り出すだろう。

しかし、人口増加の停止は生活の困難の増加だけでなく、ほかの理由があるからかもしれない。合衆国が、今では、ヨーロッパからの移民を奨励するより、むしろ抑制する傾向にあるのは、おそらくそうした確信があるからだろう。未来の人口増加の予想は、紙上では見事に算出されるが、現実には、結局殆ど常に計算と一致しない。実のところ、人口の増加は領土の広さ、資源の性質、あるいは生活条件といったもの以外の理由によっても制限されるようである。

おそらく民族の特質、民族の性質それ自体の中にある何かに

よって、限定されるのだろう。アメリカ人は空間――大きな空間を持たなければ気がすまない。アメリカ人は閉じ込められたり、押し込まれたりするのをがまんできない。すべてのアングロ・サクソン民族は、顕著に同じ感情を持っている。働くための広い空間、生活するための広い空間を好む性情は、文明の進歩とともに、衰えるどころかむしろ常に増大していく。アメリカの人口は、おそらくかつて予言された巨大な数にはけっして達しないだろう。100万人の清国人にとって十分な空間も、千人の有能なアメリカ人の絶対的な要求を満足させることはまずないだろう。

清国の将来

1894年11月12日　月曜日

清国が平和を強く望んでいることは、今や疑いの余地がないように思われる。清国は敵の国力、自国の軍事上の準備の不足を認めたが、遅すぎた。しかし、目下のところ、さらに戦争をつづけて屈辱をこうむるより、平和の方が清国のためになるかどうかは定かでない。清国が今や巨額の賠償金を支払い、朝鮮に関して要求されている権益のすべてを与えることによって平和を得れば、ほどなくもとの無気力状態に落ち込むだろうし、国力を麻痺させてきた官吏の腐敗という巨大な夢魔を追い払う努力もしないだろうと、疑わざるを得ない。一方、北京が占領されれば、自己保存の国家的本能が呼び覚まされるだろう。もっ

とも、呼び覚まされる力が残っていればの話だが。平和が訪れた後、清国には改革の時代の来る可能性がある。改革がなければ、外国勢力の支配に甘んじなければならない。列強の道徳的なためらいを期待するのは無駄である。清国が弱いとなれば、それが征服、分割、分配の十分な口実となるだろう。そういう征服のさまざまな結果を考えるのは、興味あることかもしれない。

過去において中国は、征服されても実際には何ら変わることがなかった。あたかもインドにあった古代ギリシヤ諸領において、西欧的な要素が最終的に消え去ったように、中国は征服者を吸収し、土着的なものへ溶解してしまった。清国人の保守主義は、おそらくほかのいかなる国民のそれより勝っている。アメリカなどの国において、清国人の移民は商業的な利益によっていかにその国の土地に結びつけられていようとも、依然として万事において清国人である。中国服を着、清国から食料を輸入しさえする。かれは異郷において自分の神を敬い、死後、その骨は送り返されて清国の国土の中に埋められる。彼は金があればいつもそうする。費用がかかりすぎるときには、自分たちの儀式に従って外国に埋められる。ルイジアナ州の沼沢地に、西インド諸島の不慣れな辺境に、人はそういう清国人の印象的な墓を見ることだろう。

清国人はある日、それらの死者に食べ物を供えるためにかなりの距離を――ときには数百マイルも旅行する。筆者はメキシコ湾沿岸で、料理された鶏、米、酒――つまり彼らの本来のご

馳走が、清国人漁夫の墓前に供えられているのを見たことを覚えている。そして、そのあたりに人は住んでいないのだ。もう一つの注目すべき事実は、外国に住む清国人は都会の中でどんなに数が少なくとも、本国にいるときと同じように、自分たちの休日や宗教的な祝祭を祝うことである。もちろん、その国の服装をし、外国ふうな生活をする数少ない清国人、二度と故郷に帰らないと思っている者もいることはいる。しかし、これらの例外は、外国に住む清国人がその国の習慣にけっして影響されないという一般的な事実を左右するほどのものではない。

ロシア、イギリス、フランスに支配されても、清国は現在の風俗、信仰、一般的な生活の流儀、ものの考え方に関して、今後もたいして変わることがないであろう。東洋民族は外国支配のもとでも変わらない。アルジェリア人、チュニジア人、カビール人は、フランス支配のもとで少しも変わらなかったし、インド人もイギリスの法律によって変わることがなかった。そうした国々の少数の富裕な階級の者が、外国留学の有利さを求めて海外に行くことは事実だが、彼らの感情はやはり彼らの民族の感情と変わらない。つまり、外国の影響は表面的なものの下にまで達することはない。祖先の習慣、祖先の感情は、数世代、数世紀では変わり得ないのである。

清国の場合、おそらく、押しつけられた新しい支配が法と秩序によるものならば、国民は静かにその支配を受け入れるだろう。しかし、支配者のより優れた文明を進んで採用する努力は、何百年たってもしないだろう。実際、彼らは新しい産業の方法

と可能性の多くを学びはするだろうが、その知識を伝統と習慣に基づくやり方で利用するだけだろう。要するに、西欧による清国の支配は、清国の文明の発展を早めるより、むしろ遅らせるだろう。

西洋文明が被征服民族に押しつけられる場合、好結果も永続的な結果も産むことはあり得ない。影響が有効で永続的であるためには、日本のように自由で野心的な民族によって、すすんでそれが採用され、発展させられねばならない。日本は必要あるいは有用であると思うだけの西洋文明を採用し、それ以上は採用しなかった。日本はものの考え方、習慣、感情において、依然として日本である。日本はその個性を失うことなく、みずからを強めてきた。多くの人がかつて愚かにも判定したように、日本は好んで模倣したことはけっしてない。日本は本質的に同化力があるのである。日本の同化力は諸民族の歴史において比類がない。

日本との今度の戦争によって、自助の精神に目覚めれば、清国は地上最強の国になるかもしれない。もしあの巨大な民衆に、日本のなしとげたことをすることが重要であるという意識を完全に吹き込むことができ、新しい教育制度、軍事制度、行政制度の必要性、中国古代の聖賢が教える政治の潔白を尊ぶ偉大な戒律は何としても守らねばならぬという義務感を持つことができれば、間違いなく世界の歴史は変わるだろう。日本が30年でなしとげたことを清国もするだろう――もし日本と同じく、目的に向かって進む統一性と、賢明な指導力が与えられるとすれ

ば。しかしながら、ある途方もない必要性によってそのような自己発展への拍車がかけられなければ、清国は依然として惰性（ビス・イネルシェ）に頼ることになろう。おそらく、清国のための思いきった療法は、北京が占領されることである。

神道の価値

1894年11月13日　火曜日

熱狂的な信者がキリスト教と呼んでいるものに、日本人は改宗しなければならない、さもなければ日本人は他国に「服従」することになると日本人の説得に努めている善良な人々は、明らかに、日本を東洋第一の国に高めつつある現在の戦争の大きな教訓を無視している。その教訓は、日本が自身の本来の宗教の価値を知りつつある――日本はそれを今まで知らなかった――ということである。なぜなら、日本には仏教とは比較にならないほど古い宗教――忠誠心、愛国心、この帝国の基礎を築いた死者への義務、国土防衛のために血を流したすべての人々への尊敬の宗教があるからである。

ある人はこの祭式を大和魂と呼び、またほかの人は祖先の崇拝、宣教師たち（彼らはそれについてまったく無知である）は「異教」と呼んできた。その真の名は神道である。神道は、人を正しい行為へ導くのは人の心であり、人の真の義務は、主君、家、名誉、天皇、国家への義務をおこたることより、むしろいさぎよく命を捧げることだと明言する。それは服従を命じ、慈

悲心を命ずる。それは昔の侍の精神であったし、現在の規律ある兵士の精神でもある。しかし、それが単に一階級、一カーストの精神であったことはかつてなかった。それは常に民族の最も深い感情であった。純粋な神道の復活と呼ばれる運動は、国民生活の表面に現われたものより、無限に大きな意義を持ったのである。

外国列強の侵略によって崩壊した社会組織の再建という大難事に協力するように、政府は民族の中にあるあらゆる力強くて高貴な感情に訴えた。その訴えは、世界の驚嘆を呼び起こすに足るエネルギーによってかなえられた。過去のいかなる時代のイスラム教の熱意も、新しい日本建設に注がれた古来の忠誠心と愛国心の熱意ほど、並はずれた結果を生じたことはない。30年間たゆみなくつづけられた途方もない努力により、日本は真の独立を回復するという仕事を達成するための国力を養い、強化してきた。極端な障害――貧困、地震、洪水、大火――にもかかわらず、軍事的にも科学的にもヨーロッパの１、２の国家に匹敵する、あるいはいくつかの国家に勝る国を作ることに成功した。

この大事業のために要した克己心は、まさに古来の信仰の実践の結果であった。その推進力はいまだ衰えていないし、来たるべき数世紀の間も衰えることはなさそうである。実際、日本の幾たびもの勝利は、将校の科学的な訓練によるものだが、それらに劣らず兵士の素晴らしい精神力にもよる。国のために戦場で死ぬ機会、未開の土地での冬期作戦の言うに言われぬ困難

に耐える機会を拒まれたというそれだけの理由で、人を自殺する気にさせる感情の価値は、いくら高く評価しても十分でない。神道を信ずる兵士にとって、戦場での死は喜びであり、永遠の栄光なのである。国家のために受けるいかなる苦しみも、名誉として喜んで迎えられ、感謝の念をもって耐え忍ばれる。そして、この素晴らしい戦闘精神の背後には、一般民衆の魂がある。軍隊に慰安を与え、励ますために可能な限りの犠牲を払う、一般民衆の支持がある。これもまた神道である。

当然、改宗をすすめる西欧人の努力は、金剛石の壁にはね返されるように、この精神の城壁にはね返される。日本人はその信仰――神道も仏教も捨てることはなさそうである。前者は、ロシアとイギリスが日本との友好を競って得んと願うほどの地位にまで、日本を高めた。後者は日本の芸術、礼儀、民族の最も魅力的な特性を形成してきた。日本がこの二つのものを捨てることはないだろうし、それらに対して恩を感じなくなることもないだろう。日本が今日の独立、国際的な名誉ある地位を勝ち得たのは、おそらくこれらの宗教のおかげなのである。

清国に関するピアスン博士の真の見解

1894年11月24日　土曜日

「セント・ジェームズ・ガゼット」紙から昨日の本紙に転載された非常に注目すべき論文は、これまで英語で書かれた日清戦争の問題についての文章の中で最も哲学的なものである。そ

の論文は、日本の清国支配の可能性とその支配が世界に及ぼす影響について語っている。「スペクテイター」紙やほかの週刊新聞に掲載された奇妙で馬鹿げた論文より、はるかに清国の実情に通じていることを示す文章である。強国の一つになった日本が、真剣にものごとを考える人々の心にもたらした、まったく突然の重大問題をよく伝えている点で、とくに注目に値する。「小国日本」はアラビアの物語の中のアフリートのように、雲つくばかりの大男になり、世界に不気味な影を投げかけている。かつての秀吉の大きな脅威が、今や実現しかねない勢いである。秀吉は言った。「余は大軍を集めて大明国に侵攻し、五百州の空一面をわが白刃で満たすであろう」

この論文には、将来の清国支配に関するピアスン博士の論文から、あいまいな引用があるが、この書物を読んでいない人から誤解を招くかもしれない。また、その書物を論じたいかなる批評家も、博士の真意を正しく解釈していない。その「国民性」の中でなるほどピアスン博士は、清国が軍事強国として西欧文明の脅威となる可能性を考察しているが、博士は清国の

日比谷凱旋門　日清戦争が終わり、明治28年５月30日に、明治天皇は広島から東京に凱旋した。新橋駅から宮城に向かう途中の日比谷に、高さ33ｍの凱旋門が建設された（ビジュアル・ワイド　明治時代館　小学館より）

文明が白人種にとって実際に危険なものになるとは信じていない。むしろ、その危険は工業的なものだと考えているのだ。清国が西洋文明とその工業的な方法を受け入れることを余儀なくされれば、生存競争におけるあなどりがたい競争相手となるだろう。しかし、博士は、このことが国家より民族として起こり得ると述べているのである。西欧の一国が清国を支配したとしても、この可能性は少しも変わらないだろう。清国の5億の民衆を絶滅しない限り、白人種の未来に完全な安全はないと博士は考えている。絶滅などということは夢にもあり得ない。

さて、ピアスン博士の最も顕著な意見は、白人政府のもとで、すなわち英語でいう文明の法と秩序を実施できる民族の政府のもとで、被支配民族の人口は異常なまでに増加するということである。博士は奴隷解放以来、合衆国でいかに黒人がその数を増したか、またオランダ、フランス、イギリスの統治下で、さまざまな劣等民族がいかにその数を増したかを例証している。もちろん、北アメリカの遊牧インディアン、太平洋のマオリ種族のように、白人が来る前に消えてしまった種族もいる。しかし、彼らより頑健か能力のある種族は、消滅する代わりに、法律によって生命と財産を保護してくれる改良された生存条件を利用し、極度にその数を増していったのである。

赤色人種は文明に触れただけで滅亡するが、アフリカの黒人は奴隷制度に耐えていくことができる。マオリ種族は生活のために働かねばならない条件下で死んでしまうが、カフィール人はイギリス統治のもとでその数を増す。比較的文化程度の高い

民族、すなわちヒンズー人、ジャワ人、シンハラ族の場合、人口増加は顕著である。それでは、清国における高度な文明の結果はどうだろうか。黄色人種が全世界にあふれることは間違いないだろう。なぜなら、ヨーロッパ民族とは異なって、中国民族はいかなる風土にも適応することができるからである。すでに、彼らは地球上のいたるところに、驚嘆すべきほど広がっている。熱帯地方においては、マライ人を押しのけるほどの勢いである。商人としてシベリアに行っても、彼らは平気でアジアの大草原（ステップ）の寒さに耐える。彼らは南米にあふれ、太平洋の島々のみならず西インド諸島でも繁栄している。

中国は過去数千年を通じて、ほとんど定期的に起こる災害によって、その余剰人口を減らしてきた。その災害の規模は、ヨーロッパの歴史における14世紀のペストの大流行、十字軍の戦死を上まわるものであった。近年の太平天国の乱では、２千万人もの人名が失われたと言われている。ヨーロッパにおける回教徒の反乱では、250万人もの首がはねられて決着がついた。近代におけるこれらの事件は、昔から中国でもヨーロッパに匹敵するほど起こったが、疫病や、地域の人口を減らしてしまった飢饉、数百万の人間を押し流してしまった洪水の破壊の跡は、中国の人口を抑制してきた点で、はるかに発生の頻度も高く、効果的であった。

そこで、科学文明が清国に押しつけられた場合の結果を想像してみたまえ。熟練した土木技術によって河川は整備され、効果的な植林のおかげで洪水は減少し、大小の都市における効果

的な衛生設備の改善と、伝染病を阻止する予防医学の普及によって疫病は姿を消し、インドのような迅速で優れた交通網の発展によって飢饉に対する救助態勢は確立され、厳しい法律によって幼児殺しは禁止されるだろう。人口を抑制してきたすべての天災と人災がこのようにして数世代のうちに取り除かれてしまえば、清国の繁殖力は、ヨーロッパにおいてさえ、ついに白人種の生存を脅かすことになりかねない。それはヨーロッパ人種を支配したり、ヨーロッパ人種より生き長らえるというような問題でなく、数において圧倒してしまう問題である。

清国人の知性、真面目さ、忍耐力、機械を扱う巧みさは、オーストラリアとカリフォルニアがその能力を証明した優秀な英米の熟練労働者さえ、容易に追い出すことができるだろう。日本による清国の支配の方が、ロシアあるいはほかの国による清国の支配より西欧にとって危険であるという点について、「セント・ジェームズ・ガゼット」紙によって述べられている見解を支持するに足る理由があるとは、筆者にはけっして思えない。もちろん、日本はそのような事件によって、天皇家の支配を無限に、普遍的に拡大するために、清国を利用することを夢見るかもしれない。しかし、ロシアもそのように清国を利用しようとすることは疑いない。想像できる限りの最も突飛で、最も奇妙な可能性を認めたとしても、清国における天皇の主権がロシア皇帝の主権より恐ろしいとは、筆者には考えられないのである。

朝鮮の謎

1894年12月13日　木曜日

戦勝の喜びの最中に、世界平和はいまだけっして保証されているわけではないと考えるのは、いささか不愉快なことである。日本の勝利は日本の偉大さを確立し、清国の弱さを暴露した。しかし、日本の勝利は朝鮮問題をまったく解決していない。しかも、この問題には依然として恐るべきところがある。偉大な軍人になることと偉大な行政官になることとは、まったく別の事柄である。そのことは、過去の多くの著名な司令官の歴史が示している。

日本には優れた行政官と優れた将軍がいる。日本はその将軍たちを使って素晴らしい成功を収めてきた。しかし日本は朝鮮でその行政能力を発揮できるだろうか？　もし発揮できなければ、これまで主張してきたすべての戦争目的は――実際に朝鮮がしばらくの間ほかの外国の保護下に置かれない限り――達成されないことになる。もし日本が朝鮮を統治しようとすれば、ロシアが文句をつけることはまず間違いないだろう。そうすれば、ほかの列強も面倒な事態に巻き込まれるだろう。不幸にもロシアは、東ヨーロッパで、インドとの国境で、清国との国境で、同時に不和の種をまく力を持っている。

この問題の大きな困難は、朝鮮にみずからの手による改革を任せられないこと、朝鮮での改革を強要する唯一の手段には軍事力の援助が必要だということである。日本は無政府状態の朝鮮に、また、ほとんど信じられないような悪政に反抗している

朝鮮に力を貸してきた。政府を破滅から救うため、日本は改革をなしとげることを引き受けた。しかし、どうやって改革をなしとげるかは、非常に困難な謎である。与えられた忠告は優れたものであり、唱道された改革の諸制度はそれ自身健全なものである。朝鮮の大臣たちが誓った快諾も、心からのものであろう。

しかし、政府機関のすべてが幾世代にもわたってすっかり混乱しているので、それを処理しようとする梃子（てこ）を受け入れようとしない。動いたとしても、災いを起こすような危険な方向に動くだけである。役所の腐敗が広く行き渡って伝統的因襲になってしまっているところでは、改革の前途に数限りない困難が横たわっている。政府の首脳が望むように指令を発しても、末端の役人がそれを誤って実行し、駄目にしてしまう。5万人の公務員を免職しても、それに代わる5万人は、おそらくさらに悪い連中だろう。肥った狼を飢えた狼と代えるようなことにすぎない。

朝鮮における改革は、経済学の法則を理解している一流の大臣をもってしても、また宮廷に常識的な経済観念を植えつけても、それだけではけっしてなしとげられるものではない。政府のあらゆる部局、非常に低い地位の役人に至る、社会のあらゆる階層まで、議論よりもっと強い力で改革を推し進めなければならない。イギリスはそれをエジプトで行なった。しかし、日本人がそれを強行しようとしても、否定されてしまうだろう。しかし、そういう強行手段による以外に、朝鮮の改革は望めな

いし、改革なき朝鮮は、依然として世界の安定にとって一つの危険な因子だろう。

朝鮮を日本の独占的な軍事保護領にすること以外の方法で望ましい結果が得られるならば、日本が朝鮮問題において単独政策を主張することはまずないと思われる。しかし、軍事保護領に代わるもう一つの方法は、関係列強の共同の保護と一致した圧力のもとで、独立国として朝鮮を可能な限り改革することである。その場合、日本はその利害関係から正当とされる行政の主要部分を任せられるべきであり、ロシアの影響力のいかなる優勢も、徹底的に警戒しなければならない。換言すれば、日本は、西欧諸国の道徳的な援助によって、朝鮮を改革することができると思う。そのような援助がなければ、日本はそうする望みがほとんどないし、今度の戦役が児戯の類になるような大戦争に、東洋を陥れる危険を冒すことになる。

一方、日本の軍事的、行政的な能力に対する西欧の信頼は、今や非常に強固なものになっているから、有力な列強諸国は、おそらくすすんで朝鮮の適切な管理を保証し、援助するだろう。もし清国がもっと頼むに足る進歩した状態にあれば、この問題はもっと容易に解決するのだが、不幸にしてその清国が今は政治的、軍事的に弱体なので、国際平和の危機の要因になっているのである。

ラフカディオ・ハーンと「開かれた精神」

島根県立大学短期大学部教授　小泉　凡

一般財団法人人間自然科学研究所が編集された『朝鮮半島と日本列島の使命』には、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「神戸クロニクル」紙に書いた論説記事の幾篇かが抜粋されています。『怪談』の著者として知られる八雲は、実は人生の大半をジャーナリストとして過ごしました。具体的にはアメリカでの15年余りと日本の神戸時代がそれにあたります。神戸クロニクル社への勤務は、わずか１年未満でしたが、90篇近い論説記事を書き、その中には、日本のみならずロシア・中国・朝鮮半島の未来を展望した文章も少なからずみられます。また、八雲は1894年１月に熊本で行った「極東の将来」という講演の中で、将来的には西洋より東洋が大きな意味をもつ時代が来ること、そして「最も辛抱強い、最も経済的な、最も簡素な生活習慣をもつ民族が勝ち残る」と言っています。それは、「自然と最もよく共生でき、必要最小限の生活で満足できる」人々こそ生存最適者だという信念に基づいている、つまり、「シンプルライフ」と「共生」の維持が日本の将来において最も大切だと考えていたのです。「共生」の思想は21世紀を生きるわれわれ

にとって大きな意味をもつことは言うまでもありません。

ヨーロッパに生まれ育った八雲は、地球を3分の2周して日本にたどり着きました。それゆえ、多くの異文化体験をしています。子供のころにギリシャの多神教の世界やケルトのアニミズムの世界に魅了され、アメリカではラテンヨーロッパとアフリカ文化の融合によって開花したクレオール文化やネイティブ・アメリカンの文化を垣間見、さらに日本ではケルト世界に通じる神道や民間信仰に接し共感しました。そのようにして偏見の少ない多文化意識が形成されていったものと思われます。八雲のいう「共生」とは、異文化間の共生だけではなく、人間と自然との共生や、人間と異界との共生も視野に入れたものでした。人間世界だけで完結してしまうことは、人間の謙虚さや畏怖する心を忘れさせてしまう危険があると思ったからです。そして、多くの怪談を採集し、魂を吹き込んで英語に翻訳したのも、怪談つまり異界と人間が交錯する話には真理（truth）があると考えたからでした。約束・畏怖・秘密・好奇心・愛……など、怪談が発するメッセージには、100年後・200年後の人々もその普遍性に関心をもち続けるに違いないと予測し、そこから学ぶべきことも多くあると考えたのです。今、まさにそのような八雲の思いが再評価される時代が来ているように思われます。

八雲の生誕160年・来日120年にあたる2010年、松江では2つの記念事業が開催されました。ひとつは「ハーンの神在月―全国小泉八雲の会＆ミュージアムの未来を考えるサミット」で、もうひとつはハーンの精神性を造形芸術で世界のアーティスト

が表現する美術展です。2つの事業に共通する趣旨は、八雲のもつ“Open Mind”つまり「開かれた精神」を現代社会や未来に生かすとすれば、どんな可能性があるかを模索しようというものです。小松社長様には趣旨にご賛同いただき、多大なご協賛を賜りました。

八雲の極東の将来に対する考え方には、小松社長がめざす「共生」「和譲」というキーワードと響き合う考え方があるように思われます。一国や一地域のみの権益ではなく、世界全体を見渡した上で東アジアの未来を考えていくことは非常に大切なことだと思われるからです。